佛諸天爾波抄

四

へ 5
4422
4

門へ5
覆4422
巻4

昭和九年
九月二九日
購求

俳諧天保波抄巻之四

○十九家下

○志家

世ニハ世ニ助字トイフモナリ。助字ナラヌコノ注ヲミテ知ルベシ。過去ノ志トイフハ下ノ去倫ニアルコレナリ

志

しゝ。わがこゝろの筋へゆくこゝろやく。その格をあらわすなんなり。去倫の部に出るこゝろのしも。此下義く。そこゝろあくやて。みるべし。時結掛ふられをさりと花づけく。ゆくとうつる所とんぼで。といひ。こゝろくゝ結掛をこゝろて知るべし。汗くゝ去業に去ぐよ。こゝろこゝろくこゝろかゞとあるゝ志なり。これゝ。こゝろのまのよ。こゝろこゝろくこゝろ。こゝろのあの天ぐこゝろへこゝろく

[illegible]。集中例みそ。そのかの[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
○何[illegible]
[illegible]。集中例てそ

拾　初ざくらをまとりてとりあげたり　芭蕉

○乃家

の

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

さくらを。山さくらをさくらとも。佐くらとも。さくらのしらを所をもいふ。[illegible]
つらしひ方大さ[illegible]。さくらで。梅が香にのとゞくく。[illegible]
らくるに。古今集に梅の花のすがたやどりとめる歌
あり。梅ぐさといふ。梅の香に鶯の花のうめをたづねをしみて。梅の香
といふ。鶯のなのうぐひすもうめにくる。梅さくらくさ香とまこと乃也。
かのごとくこれあるべし。今の俗。いでつくりたんがしらなど
いやしみいふてこれなり。梅は梅に宇治拾遺を
引れたるごとく。[illegible]

荒　兄者のいろくあげくりむの時　蘭渚

円　桔梗やまざうげろの一二寸　芭蕉

見　のつゞくとあの初秋　[illegible]

炭　抱上るの小俵をすぢ　利牛
猿　なくなりし草　猿のなく　呼水
続　初あし　畠の人れうけるうり　支考
炭　竹の皮　書る文の書く　石菊
員　降辰も入歯　寿のさくかく　冬文
春　内侍のそく　代　乃眉の図　荷兮
猿　猿川の猿　せぶる　秋の月　芭蕉
日　一ト吹き　月の木の実　月
員　火ぶくのそ　くれあり　荷兮
猿　白玉乃雪　ふぶく　猿うれ　車来
日　蝶のまく　一夜わそう　蕙のせく　宋歳
日　堤よう四　田のまやぶく　いさぶよき　元苑

日　飯やの七屋のみそ　仔きき　日
続　庶汗乃　ふる　文芸
員　氣ぶくのよ　野水
猿　年のくれ　やぶれ袴　板風
冬　五形すくれの　畠　友　杜国
員　狐つまと　ひとの　ふくし　許人
瓢　着涯の歌　ふぶく　嗅氣　里東
日　鉢ひなく　毎　寿の出　孫頃
員　鐵のそす　どろ　乃　荷兮
猿　梅ぶ香や　酒のかた　ひれ　蜂蕉
ぶるるつ　ぶるの　墨く　所　拾の　所　ぶの
ふん所　ぶぶ　むふ　ぶる　おあ　ふの　ぶを

そのうちのうに、あるいはすぐれたるあり、
ようしくぶれば、中ごろのうたにもあるべし。このうちの句どもの
うち、形ちかれの品ふるこゝろあり。四季とうたふ品むかし
ゆるに、さてにある人の作品もまたかく、五形
董ともあくやるにく、ゆゑ。すべて天地の
ゆるり面ぶて、かつてくさの義はよしみてふまるわざ。今うまくうく
これをいつかり。○まことにこれのくもむく古に引くべきに普通の
つうはやうさにてもあり。されど上古中古とすくるの事にく近
古ちかられくるのうち。上古とかくるのもこゝろいつかよ
詞すべく正面にかゝず。中古ちかたに正面とのこゝ
こゝろむとする者よ。上古のそこゝろをいくいつるをやぶさかく
異てつゝまず。今く詞のこゝにいつくもむしのこゝく。言葉と黄さる

ゆゑ。世分をもて字をあれば。異例をつゝみし。その心に深く
いつひがこし。これをもくも。中古近古のこゝろとなるこゝろ
とをまくんあるべし。かの西の黄ゆゑ猛蓋の序のごとくにこゝ
ゆゑにこゝも。上古を貴ぶといふ人。うくべのおもかなる詞とる
移ぶべきにく。この幻術といふ所にんつくんかなし。俳諧くせ
なれば。こゝに言葉をもてゆゑ。なりとつくれんかなりとら
つくさ抜ん

荒　人うすむこみて陸奥の塩干かた　友重

日　雨の月どこにかくれてこゝろの義のり　武人

日　月のつくうとうとうとして詞の柳ふる　定水

日　月のうるゆくワゲかりの柳うれ　抜遊

員　蝙蝠くみぶくに月の柳　荷芳

続　明鴨や東風とつまくの磯ばし　釣舟

甄　秋ぐれの舟をうわぐる浪の音　曲水

冬　小の御門なしあけの春　芭蕉

いづまも。あるよつまづく。詞あるを。はのめらしまやまもいひ。みそ
ふの詞よくくしのこいうまり。さくこんでは風のてくるとそ後の
柳はとゝ。ウシロニスルとらをのこうてくるや。秋風の雨を
こゝろぐくとゝ。ツヨク立といふまをそ。ふまをそ。ふまをそ
りやくつりみのかりとゝ知るべー

○みよとゝるのとゝ。ゆづけく。ノ如クとゝまんのあり。これ上句
よるゝ手とゝもまのくとゝ山ゝ。物とゝ。ゆとゝ。ゆとゝ。ゆとゝ。

春　陽炎の如くうちうる夫ぬるく　知人

猿　雨の形どりの傘事一迅速　宗水

員　さゝ雨の如くむれく降ゆる女宮　知人

猿　世中を鶴鴨の尾乃惜まず　九兆

○手ゝ。の爲とゝく。一首の作ゝの。ゝうまゝあり。吉ゝ。ゝうまゝ
ゆくゝ人の氣とあるゝ。ゝ首の作ゝ多し。いづまゝ。ゝ上ゝんの義ゝく。ゝ
なのゝく。ゆくゝ作ゝのゝ。ゝいゝゝるく。ゝ作ゝ。ゝ例みゝ。ゝれゝ。ゝいに
くゝゝのゝ手ゝゝゝ手ゝゝゝるゝ。むゝゝゝゝにゝゝゝゝゝく
ゝゝゝゝゝ

瓢　芝山ノ弓紀の関ぢず　頑了　孤頑

集　ゆきうくの雨や西施が合歓の花　芭蕉

春　杖の末こ高ひ月ぞ門たらんもく　雨相

炭　祖父がくの火桶も平きだりも地　其角

冬　四東の書ひが坊よ月をとるく　貞五

員　後ぞいよいよ〜こうるさ　知人

続　杖れば雪一寸よりもく梅の蕾　芭蕉

同　孫が門くもあり祖父の備蔵　馬莧

猿　けまもも盧同ぶ男居なりけく　文邦

同　花ちらる雨も西瓜が衣ぞく　芭蕉

同　海月をゆくうぐが笑ふこうし　尚白

同序　これが序もこの今桶ふもく　其角

続　年ぶ年ふくふ川ともやずよ物語　文考

猿　摩耶ぶさりもきのこうれる　野水

瓢　数白つくあれば早ひぐ　曲水

員　高ひが毒よかれてこれ　胡及

猿　丁雅ぶ荷ゆもこぼしう　凡兆

員　そのぶくこうこうるなぶ麻　荷兮

炭　雪面ぶ樽の小箒を拾ひく　孤屋

猿　ぶぶまが瓜紅のこ高ぶけ　探丸

荒　杖かざり伊勢が赤黒よんく雅　其角

同　山ぶつが寒山子つくわく同ふ　言五

同　おくもがや小町（イチハラ野ニテ）が骨の尺ぞく　洒堂

続　まち面や光うりぶ鍛治が遊　桃邑

月　里のあが藪にはびこりて　支考

日　小米も奈良のくづれや瓶法師　百子

猿　夏草やつはものどもが夢の跡　芭蕉

うれしがりて、はつ花のごとくつつりの音や、ゆくさは法師のあく
けるとく俗語のがかなるまゝ。今此句をこゝろうるに、
あふくかなうゝ雅俗のつりあひたゝさとつゝるごとく。がたすべ
て、その上の句、俗用なれども、はつ花の句はつ句なるとゝ。下句の句
ようとゝ、ゆくさは、ゆくさはの句、これ俗語にかゝるの句、古て
とゝれのとはうまし。この上句、俗がかゝる和の俗語にあるの
のとがとゝ、ゆくさはのとゝ。よくけるとゝ。拾文がら。ゝ俗
語なるゝ。今此句をゝ。その俗語がうゝゝし。又その俗語なるゝ
うゝゝし。孫そうゝゝるゝの。ゝとはうゝゝ。ゝれゝゝて

俗語ゝゝとゝつゝゝ。雅俗まゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

炭　雑仮の鞍をかりやだらがくれて　野坡

月　叶ふる帰しく角ゝ雨ゝゝる　梨半

月　馬ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　孤屋

続　花のゝゝ蹴鞠の方ゝ芋ゝゝ　里圃

月　荷ゝゝゝゝゝゝゝゝ馬つぎ　日

炭　浙江ゝゝゝゝゝゝゝゝ　野坡

月　婿ゝゝゝゝゝゝ娘の世ゝゝゝゝ　梨半

続　夜孫ゝゝゝゝゝゝゝゝ　里圃

月　山ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　孤屋

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

こんぐわり

○遍家

【へ】

へいこく方角をもちいることはむかしよりあるなり。万葉集に、方の字を、へとよめるは所なし。行方かたのごとくなり。ほ世ゆくをトカ久仮名誤レリ

ゆゑしらぬ国をたづねゆくに、ほ世の人きたれるをうれしがる。

手かたにまたづへとよめるも所をもこゝとしるかり。これ雅にて、へを俗なりとんでうるがたし。俗にて、へをつゞまるもへとよめるなるべし。今も年言にとり国もあるし。そこのみならず、ごんはまぐさ、ぞうはまぐさ、ぞうはへゆくたぐひなりかたぐあり。こゝにいでゝうちつきとうちていとんとなり。へとそだちうつるをむりやくに何となるべきなり。

古今集秋部に、翠簾の内の西風がすゝきをへわたるとかゝるあり。これ俗世の人のえらびあやまる。上をふとよりしかば、遍昭ゆゑ、ゆゑ、ゆゑのこゝろをもとめ、そのゆゑを定めんとあやまれば、ゆゑをへとよみかり。これ五十音のいと俗とえ俗とのわれかたかりかくいひうちくこれだ。へをこゝにとへとよめばうしめ半ゆゑ

続　[illegible]

炭　脊中へのぶるみとすやうに　拙陋

日　せどへまとれて山へゆく道　盛水

続　十里だうのようへ出りて　四園

炭　りゝゝと日向の立へおさしもく　利牛

日　お頭へ菊のしらゝ雪ぞ　四園

甄　つゝまを出でゝ一方へ出りて　紅頑

炭　俗称のようにふげんを出る　芭蕉

続　柳のそばへ門を出て行　四園

集　うの玉を（俳寺院天竜法下）羽黒へうゝ法の月　芭蕉

日　山端へ出るゆなるうしろ姿

○良家

ら

らとふてゝは、その物の心ゝ同じ事なるものゝ物のよりてつくるべきなり。茅原かどゝ、茅の宮とうたへるなどゝ、古今の仮名かきにうたへる。そのかつまりかるゝ事ゝ、ものゝ名をつくるなどつくりたる。これ世えつくりたる。べきなり。とふてゝのらまこれ俗名ゝ。術法物ゝ出より。杉上古ゝ。

ろかどつくりたり。（イヅレモ万葉集ニアリ）らん

ゝゝべゝ集中例みず

○能義家

の

ゝゝ。俗ゝ。ばかり。ばかりかどつくりたる。ほ毛ゝ。のゝとだりを鼠どくつくりたる。ゝ。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冬　こがらしとのゝ地蔵堂町　荷兮

春　うやゝしかりけり　神輿うく里　きを

に　蛙のゝ[illegible]てゆしの花[illegible]　野水

に　[illegible]低のゝ[illegible]ぞ雪のやどり　猿人

日　[illegible]白河のゝ[illegible]ある[illegible]　李孔

月　[illegible]　野水

蕉　[illegible]月[illegible]　猿人

集　月のゝり西[illegible]角ゆ[illegible]　芭蕉

いづれもあゝへだりといつるあり。事のはづかるゝ[illegible]

おもひぞ。扨この次乃だりの条とかゝやてんべ。されだのゝ

乃だりつゝ[illegible]なるゝへ事のゝてゝ[illegible]

だりつゝは上ゝいづく。[illegible]

はりゝ[illegible]のゝとだりゝのゝ[illegible]

員　数のゝるだりゝ　[illegible]の[illegible]　猿人

炭　損だりつゝ[illegible]　松風

蕉　[illegible]花のゝの山　[illegible]

日　今[illegible]だりの蕉　芝

日　書だりの[illegible]　[illegible]

日　雪のゝ[illegible]　[illegible]

日　雨のゝ[illegible]　[illegible]

同　　春のうらうらく桑の葉だらりのうれり　不知
同　　うらうらだらり蕎麦やるしくれか　傘下
同　　枯あり春だらりみるる野か　士林
炭　　待だらりうらうらもどる月　野坡
荒　　半らりぐりの人ノミヒカリシニ　蕉雨
猿　　やぶのうを柳だらりハ姿か　探丸
炭　　月をいりあげ城のにくだらり　利牛

叶白どものうち貞室ゲ若うるうらうらうるうとと
だ何ちんのうるいうらうるのうるれどさあず上うれうく
うらうにく自然とうるびもくにはとうるかうくきかの月
をまどあるる行雲あれだだりの月ようけうり松風が損だりうく
とうるうと。うのうと。損徳のうれをむのうとうくだりうとうう印。

寄ようとうだりうくうくうるのうるれどうるのうるれどうるのうるれど

炭

集

第四ごと川のなごりを埋千代　治徹

まつ　やまの仙の苔のうもれぶ　世蕉

れかり。古そとそうれはだりりとうう新やり。古言とうぐ
うの詞あるく。みこれくく別かり。うれく伝とく字とう詞とあるる。
ようのなどの詞のなどかどうつるれも

まで

まぐくといふ詞。これまでだりるとたるとげれやすと詞し。たくで。
詞とよむまでなく庶のかどのごとし。これ
限をとくいふ詞。されども海苔。ところくこうでかどつのうれ。
けさくあるがごとれをとらずしくく限をとりる詞めくくれど。
くまくいくくく。詞さすとうつのようあずりで
き命のくくあるかの見るれだ。これくいくくる限すくだで

とくくくぬどあるとし。かのいたくかくくさのむさるくし
つくくも。小石のくくくかくるどり。りあたりのくくの古行の
むくつのかいつあくく。りどくくいつあく。そくくるくくくの人のくくとぶまで
なり赤かくるどあり。くくでくつのくくも。コレハコレニデ所出赤シかどで
く。古関くどくくいるくどきどり門者くどくるくくの時人行はくく。
即おのびりくく古筆のどくし。又小出くびくくくくの詞。コレニデオジ
ヤッタラ甘酒ノニウくくつ。これくのむくくくくるふくるの呂くくくく我
のくふくどくくくくどの力りどり。推くく甘酒のくやくくくくくん。
ふくのやくつどふくくくどくくくくくくどくくくくくくどくくくくくく

荒　八幡宮奥ゆかしくこそ　祇園社

こもれる。社殿の二重三重。あるいは三重五重。あるいは重ねかさねたる。

けうく奥ゆかしくこそ　ひしかり

荒　いざゆかん雪をかこちころぶ所まぐ　芭蕉

月　咲まぐ　砂地つく　月見りれ　任他

日　鶏頭の雪をかこちるまで　紅ふ　市川

俳　芥子蒔く畑ぐゆかん月見ふ　空斗

月　二見まぐ　底抜けぬる月見ふ　支考

冬　野菊ぐ　ぬけぬる蝶めぐ　芭蕉

瓢　故人の目をのぞくまで　寄りて　日

炭　祭まぐ　つぐ　花ぐ　月殺

員　八日の月　ぬ　入まぐ　蒔子

拾　かりくまぐ　年のくれ　芭蕉

俳　ぐ　柿の陰まで下駄の跡　魚日

炭　ぬまぐ　水ぐ　ぬる　あやめ　桃隣

日　蝉のあまぐ　相のひろぐれ　日

冬　ぬぐ　清水の水ぐ　ぬ　芭蕉

瓢　潮のぐ　柳の下まぐ　日　和ぐ　路頭

俳　麦ぬぐ　鯉まで　喰ふ　山ぬ　花紅

月　かぐ　ぬぐ　ぬ　かりのぐ　ぬ　人

月　魚の骨ぐ　ぬぐの花ぐ　芭蕉

炭　ぬ　ぬ　まぐ　ぐ　ゆる　入舟　桃隣

この桃隣が句の。ぬぬぬ

[illegible]

世のしだりふるごのこうたつつてごとぐ天乐

波かり。これ四ど待賢門なる天乐波かりなれども。この頃

この頃ひとつ出やり。これつが吳の見解。所伝

物のてゝめくゝ[illegible]なれかり。これのあるなるべし

○陀尓家

だに

ごとくゝ詞く。伝てのサへて詞とあるる何也。又詞ゝるん

敷ゝん。梅ゝん。カごとつてふた ナリたと詞とあり。みるの外

デモと詞ゝるる所もあるし。ゝとで。結ひごゝのあるゝ

系統でゝゝ詞カど。結口にゝごたのそゝとつゝ也。又詞ゝへ

ゝごゝくで。ゝとにくゝひゝふ詞ゝるゝかりゝゝみくゝれい

ゝゝ。これを。ゝごたゝとつゝ。又頭にゝ。ゝ[illegible]。ゝ西ごり

ゝれど。やゝく羽織なりゝもゝりゝと思ふ。羽織ごゝかゝとつゝ也。

又梅ゝゝ。ゝゝで。井柳ゝゝゝごゝゝゝ

さへ

引くて、若干集まる。副の字は能はずつかふ。
これをみるに、早副のたかなる句。通ズレバナリ（トサト音）副とく。うるる句。
はつく。うぬぼれくるひ。ぬれぬ。天霧はる時は。その
うるはしの。とうまどりぎる物とうびうるる句。かうる
なりとぐるのかうしぐ。引て
やまのかうの路人かうしんと歌。ひらく人食と作ること。
祝の字やまとぐるとうぐるの作。その書うにく。命と
うぐるとうくれぬぐくうしたる句也。書ふうあるぐ。
和こぐかたうかりくいつぐとを。その副なる句だりをいとくとる
方をいうめて。例の言葉のそよつのし。うくのぐいふうるあ。
うるるつくこれをみちやまるも。ようくんうそわうらるぐ。さ
きぐ。古言の引て作るの三テ五ツ。言のぐ六作るのサへ

ろかりとうるぐ

荒　うれぐうるく苦くあるの塩木か　千閑
炭　星さくみるぐ　二十八日　彩花
猿　すぐしうやこの作品作る　若良
春　馬をくなぐ　草意
使　くすくさく調あるりるの雨　乃祇
冬　苔麦さく青し　滝賀樂の場　四水
猿　ひうり和くなり山のやうて出どくせうしうく　草意
日　すぐかしし島のうるくさくあるを　日
荒　うのんの鼠（ユ　ヒ　ヒ　カリ　ヒ後）さくなり　秋乃風　基角

これらは古言の引くうるる句とかり
荒　作品めるくるのつらぐ　斎

猿　　石部山　　智月

瓢　　ありくほどの　力　さく　邪き　　蕉

荒　　すびりさくけ　ごゆ　えの　蕉俵　　蕉角

これらいづれもごとにあるなり。中にも蕉角が句に、

の蕉俵くわよりおもしろく。天王寺を殺しくるひさや。すびり

ぶこすぐこしつく。すしく蕉俵かぐこくこいつすとゆりもん者の

てこくかわぐや。くそくこ仕術結掛ともみくんぐ　芭蕉句

集く。荒壁が西に蕉さやるのりくこゆくれやこいつ句。まこ

これくこ上なるわぐこいつんるれだ。此引くく伝語の引なるず。蕉角の

句づくれくこすぐれるるあり。くこぐくこりこりぐ

○余利家

よりこと

よりこく。すぐく。さす前一慶ありく。ここりもりこ。おもし

うりす附の句なり。三例あり。いづれも。ここよりいづる事。人のやひ

かけあるぐこくこめぐ

○才一例　いづるとりとこ云

うれくこ。すくだ。あこりあくゆく。皆こり

外へ出るかぐこりの特つく句。伝言おつく云

蕉　　そころりみこれる祖のさくこ外　冬松

月　　くくまこくくくこ人ぐ寄これ　月笛

月　　かりのありや初おこりのあくれ　昼水

月　　つくくこ改ゆくこまる。ひくこり　青江

徒　　巨燈こり高くゆく時くく夜半外　青芝

荒　　芝こりの秋こりいづるこくこれ　下枝

同　菜より兼て物いつやうや家のを　角淳
続　すゝしさや橋より見をぜうさげる　支考
荒　竜ゝり水より酒とる向ぎり　竜雨
続　中國よりの水の吉左右　雅郎
員　久さよりも油あげまるむぎまた　誠人
猿　はゝぎす鳴ゝりゝの下ゝり　丈草
冬　秋より砂ゝとりゝき山りげる　芭蕉
春　岩の間より菊ゝ咲る里　呑水
駅　ゆゝり菊ゝうぬ別して　新芋
猿　寒より菊ゝくるものゝしらぬ　石口
同　秋ぐやや田上山乃くぐゝより　尚白
同　ゝよゝゝや義のゝより初ゝゝ　旦菜

同　鶯のあゝけゝるゝより山路ぬ　式之
続　七ゝより花乃ゝゝゝきる女中ぬ　陽和
炭　与力町よりむ西風　柳平
同　ゆゝりぐゝ寺苔の下ゝゝ　同
春　鳥羽より出た奥の田ゆゝ　昌圭

けゝるゝものゝゝ。計二例のゝゝものゝもあれどゝ
ゝゝず。よゝゝゝ言ゝ言ゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ菖野昌外
の八分きゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○第三例　[illegible]

[illegible]

[illegible]

かう

うつくしいつく。こだちの伝説のまことにすぐれたる人あれば。さてあらず。古今をあつめ用ひられるてふ。中昔のたどりへ上るの分際也。はやまさひらん物語かなどく。辛時「いつくしきもの」あれば。そうよみもそ中昔のはうかくあきもしくかれるをこのべ。これはたとへ。うつくしかれるをこのべ。又なれるようのかたり。よりてよりしかも。まにくしくつくるぞ。いくばく自在の変化をおさん。長世で表ぎりをみがくもとかれるをおげくべ。うまして。神そうおれよりの事かたりう。これよ二例あるく。若うう。裝ううそ。若うう。裝ううそ。若うう。裝ううそ

荒　若草うつすぐるふぐのみすあぶ　長瀬

続　後よびの西侍を今度度変う　寸考

炭　うけて隙うつ　檀ちるかり　呼蛟

日　隙うつ　せ川　嫁とよびまる　日

日　婿とよい雲　くうつ　ちうつ　孤屋

猿　股川の朝うつ　めうつ　川こうて　九兆

続　きのうつ　日わうつ　まる月の色　沾圃

日　山うつ　石よ　花をうつく　出す　叶言

炭　賣りうつ　人うつ　つくみやうつて　孤　光色

日　川うつ　すぐ　小鮎　うつ　する　石菊

日　瓜の花　これうつ　ナンボうよう　桃隣

行うつて　かうつ　川　あうつ　ぶうつ　ぶうつ　ぶ

をくらげあるんし。をしこれを。かなしつのあるよりて。ぼぐぼと。うの加
賀出ちくんつで。くしこいつ行あるんぐたく。うのつらいきのそれく
んつぐー。伝授イワケとい行ぐたかるつケり。
○そりゐた。このゆきとたむ行あり。上の物うしこ行ぐ。モノ、
クセニしいんかり。それぐ。かんのそれハ。世りしこゆきのそれわ
きぐかり

○那年家

かん　これを中のかんと並ぐく。五属のちこ出やる。此のかん又げト
の六倫のうちの。去倫のかんぐるハしこなり。これを多く文章つる
かんにく。そしらあるハてすくるー。今世に和文とりくく。いるく
るん伝るかぐ。いうるかと無ぐつるんぐー。きしこんくるちせ
ておくぐぐ書るあぐ。伝くこうる用るくわぐつぐ。ワガアラハセル言
灵并ノ附録二

クハレク
イヘリ　かんしこ。一章一段一篇のうちに。そこかしのくんをかり
たき抜きしこ。るんしこつくる事なり。まわぐ。なんこう用ある
所ぐ。ぐくこうこの言えこう所くくしこみぐー。なしこ言くぐ
ゐこ混ぐぐして一立へくく持行ぐるのとしこ出るくい行るれ
ぐ。くくるものをとひちすくく。ちくむしこのくくちんこするんぐ。
伝くこ。抽徳するちくく。ドウレテナちつこ昇これくく。こちぐ
んこあくくちんこくいつく。ちくさ。これかんこれとうやこんー
なぐこちり。集中白居易ハ勇士菅沼氏曲少ゐの伯父

俵幻住　いくぐの伝何ぐー。

こちんこぐりし　芭蕉

炭序　あい吟こちん篇かりて。ついこいちつちの文こそ

こわりのこちかん　去来

かどみくらり。こぶまきそのみこむらくそのそこらの時くひ。ワガ
所さがきぬ素とまるべー。上古ことなりもとつり宣命をどくれ
ぎくみしらを

○碁盤家

ごと

これく毎のんかり。頃ごろうるく。メビゴトニとりてみるべー
ちく名をとりけらく。信ことも所ーさしつて。これとしらこで百
ゐるちく五六十かしんとこの時をと。所ーこそてつて時の初
集　えるつ田ごとの日くそひれ　芭蕉
同　秋すでしくるごとくむけや氏茶る　同
同　雪ごとうりでりうもむするが　同

○毛天家

もて

こわくそ。ちくこのく。あくこで。年りく大だしこそるなどこ
ゆくつり込初し。年りくあをりくるどつこりゆ。コレモ故アラバそべし。今
ハ此羽ノ持前ヲこそり
この羽て集中例みこ手。こそ毛ちくこの羽。このりくこ日ち
の羽りり。ハかりくこ。ハかりくこはりつごとこ。これど。りくこと
て。その物とあてつりこ。ハくこりの物とつこりるくあり。伊勢
物語の。ハつまりのすくこくとをとやべー。枕そのこも。ハ
歌の。ハつくこくりり。ごれくこりくこりくこりくこりくこりり

茂　紙姫くこくこりくこ。まこり酒の物　其角

まこ保こ。物イヒモワテ天クなどこりこモワテと。りくこと古こくこもつこりこ。ハ
りくゆけで。ハこりれりくこくなどこ。ハこりくこくこ。ハこりくこくこと。ハこりくこくこ
ハこりくこくこと。ハこりくこくこと。ハこりくこくこ。又二居テ デアワテなどこ。ハこりくこくこ

しくこぼるるのあり。折結ばるくりつ

集　園扇もくりつ　人の脊中つき　芭蕉

○加保家

かほ

これてたど・顔色かどうあの・てそこにかつちもこそ・あ
ぬ・ぬしらの・ぬ・ぬ・ぬ

[illegible]

○那加良家

ながら

ながらとは、汗、ほせにくく、ナレドジャケレドとかどいふ何のごとくなりつるあやまれり。ナリニとは[illegible]

[illegible]

[illegible]

日　年くれぬ、笠きて草鞋はく　日

荒　枝なりに雪こらしやゆく冬籠　倉岳

日　むかしがら西施とりくさくさ　牡丹か　越人

日　かくるがら師走の市に寄るさびん　日

続　憐れ　みく月入るがらや蓮　採　利合

日　みのうらしやの網ながら　花　治國

様　骨紫のうしれるがらも木の芽か　凡兆

日　うぐいすや宣に矣をすたるがら　魚目

日　昔ながら花にまじるる水仙　芭蕉

続　やれ梅やの世枝こがらし土ながら　荒雪

炭　世　こくるがら居風呂をもれ　孤屋

後　下関や地獄の海の春　荒雪

いづれもよくよくよく

炭

炭ばかりにあらず　吟抜

日　投うちもそぶりもきくめるさせ　張屋

まきをまきをかぶる例みるべし

○加天良家

かてら

ぐてらいふて。ものをくはへるいとぐち。かてらといふ。かるんるより。らをるをいふをたゝやくみるべし。俗てらをもいふ。又かたてらいふんなあるべし。ひとつのものを又一事をとくとくすることを。これ又一事をとくとくのものをもとくるゆへ。すべみぐるこゝろをみるかたゝるべし。俗語をもゆへ。集中例みべし

俳諧天和改册巻之四終